

昭和
和
二十
四十
三年
九月
十月
十五日
第三
行(種
月郵
一回便
・物
十五日認
發行可)

(通第二三二号)

慈光

第二十卷

第九号

次	蕩 児 と 窮 子(三)	福島政雄	(1)
	脳神経のマイナス過程	柳瀬留治	(8)

疾病と信仰	麻生介	(10)
-------------	-----------	------

目	米寿老人の一人旅	三瓶徳英	(17)
---	----------------	------------	------

	歎異鈔 第三章	花田正夫	(20)
--	---------------	------------	------

蕩 児 と 窮 子 (三)

福 島 政 雄

今お話申しましたことで大体長者窮子の譬の心持は申しあげましたつもりであります。法華経は御承知の通り天台宗とか日蓮宗では正依(しようにえ)の經典、中心のお教であるところいう風になっております。

私自身は前にも申しあげましたようでありますけれど、仏教のお経の読みはじめというのがこの法華経でありまして、その最初に読みましたのが数え年で二十四才の一月からであります。どうして法華経を読むようになりましたかという、矢張りそれまでに日蓮上人の御遺文などを大分感じて読んでおりました。日蓮上人が法華経、法華経と云われるものですからそれから導かれて法華経を読もうと思ふようになりました。けれども日蓮上人の信仰に入つたわけでもありません。とにかく法華経というものを読んでみたのであります。そして二十四才の頃に前後三度ぐらいくりかえしましたが、その頃日蓮宗の方が法華経を和訳して大分言葉をくだいた和訳法華経というものが出ました。山

川智応と申される方でありましたが、その経を求めてまいりまして二十四才の一月と申しますとその三月には大学の卒業論文を出さねばならぬという時でありましたけれど、卒業論文なんか第二の問題だということを考えまして、とにかく法華経を一番に読むというような考えになりました。三度ばかりくりかえして読んだのでありますけれど、さあ何も分つたのじやありません。けれども分つたような顔をしてその頃私が出しましたところの「教育の理想と生命」という教育学関係の著書があります。その中にこういうお譬をひいたりしております。ところが今考えて見ますというところともこの法華経のお譬が分つていなくて分つたような顔をして書いたというだけであります。

それでは法華経が何時から分り始めたかと申しますと四十五才であります。夏法隆寺にこもりまして佐伯定胤親下から法華経を聖德太子のお註釈によつて御講義がありまして。その講義を八日間毎日聞きました。その時から法華経

というものがすこし分り始めたかと思ふのであります。

その時は大分感激をもつて御講義を聞いたのでありましてあるところの御講義などは、これは滅多に聞かれぬ御講義であるという感じをもつてほとんど涙が出そうになって聞きました。親下も仲々でありまして非常に熱心で毎日午前が御講義でありましたがはじめの二日三日は御講義には力がこもらぬようでありましたから七十才にもおなりになるとあんまり力が出ない、そんなことを考えて聞いておりました。ところが四日目になると段々力が出、五日目になるといよいよ勢づいて、六日目、七日目とだんだん力が出て八日目になりますと朝七時半頃から御講義がはじまって十

始めたということでもあります。そうしますと大分その時から年がたつて、私が来年は数え年の八十にもなりますから、だから分つたかと仰言るかも知れませんが、実は分つたとは申せません。実は毎月一度、法華経の会をして若い学生なんかが主であります。法華経の話をしております。人数は極く僅かで二人とか三人というのであります。けれども熱心な若い人達でありますからこちらは大変張り合ひがありまして月に一度大変喜んでお話をしておるのであります。そちらの会でつい先日長者窮子の譬を話しました。その前に火宅三車の譬を話したのであります。その火宅三車の譬を一寸申して見ます。

これは御承知のように、長者の家に火事がおこる。長者は外出していたのが帰って見ると家は火事で中には子供が三十人、火事だということも分らずに遊んでいる。そこで大声で、火事だ危い、みんな出て来なさい、と云うけれど、子供等は火事とは何でありましょうか、危いてなんのことでしょうか、というて一向出て来ようとしなくて、これではいかぬというので方便を考えて、お前達いいものをあげる、外に出て来ると羊の車、鹿の車、牛の車、そういう面白い車があるといわれて、子供等は急いで出て来るのであります。そのなかで子供等が火事の中に居りながらちっとも危険を感じていない、そこを感じますのであります。

二時頃とお休みになってそれからまたはじまり、十二時頃と云うすこしといわれますので、法隆寺の畳の上に褥をつけて坐つて、長い時間聞いていますから足が痛くなりますのでやっと我慢して聞いていましたけれど、十二時になってニコニコしながら、もうすこしと云われますから十二時半か一時頃と思つて我慢して聞いておりますと、一時過ぎてまだまだ続く、一時半になつてもまだ続く、とうとう二時半までになりました、それまで非常な熱をもつて話されました。その時のことが忘れられませんが、そんなことがあつて、その頃から法華経というものがすこし分かり

す。

火事というのはこの人生全体の問題でありますし、その家の中は火事ばかりでなくていやな猛獸惡魔、いやな糞虫のたぐい、そんなものがうじうじしている。その中に子供等は平気でいて、火事とは何ですか、危いとは何ですか、こう云っている。こういうところを読んでもおりますうちにああこれは自分のことだということを感じますのであります。火事というのは三界は火宅、我々の生きている社会というものは実際の火宅である。その中に猛獸のたぐいやいやな虫のたぐいがうじうじしている。それが法華經の講義を一寸見ますとその虫や獸のたぐいを、これは我々の間違った心持、こういう我々の嫌な心持、穢い心持、それを虫でたとえてあると云われて見ますというと、あとの偈文（げもん）で繰り返してあるところの沢山の猛獸毒蛇毒虫のことがのべてある、それが実は自分のことであつたかというふうなことになるてまいりますのであります。自分のことでありながら自分がそれを穢いとも思わず、火事を危険とも思わずに平気で驚かずにそこに居る。これが今の私の状態である、今はかりでなく以前の私の状態である。實際いやなものを自分は一杯もっておりますけれども、それほどいやなものと思つていません。そして自分のこういう考えは大事なものであるとか、自分にはこんな才

であると云つてあります。つまり声聞、緣覺、菩薩とかよりも、もう一段高く深い仏のさとりというものをあらわしてあるというのが大白牛車であります。はじめの三つはお釈迦様が導きはじめとして三つの車というものを仰言つたのであります、本当は一つの大白牛車を与えるために導いて下さつたのである。こういう具合になっておりますのであります。

ところが一体大白牛車をいただいてそれからどうするんですかという問題があるのであります。法華經の本文にはそういうことは書いてありませんけれども、中国の何の時代でありましたか法華經に関する論義がありまして、大白牛車を貰つてどうするのですか、どうするんでもない、その車に乗つてまた火宅の中に行くんだ、こういう解釈になつてゐるようであります。つまり仏教の精神というものは一度はこの何ともいえない嫌な世の中を逃れ出るけれども逃れ出たきりでそれで終りというものではない、そのつとめを尽くすというのが本当である。それを聖徳太子の仰言るように、八地以上の菩薩、それが衆流（しゅうりゅう）に冥合（めいごう）して更に異趣（いしゆ）なし、といつてむつかしく説いてありますが、衆流というのはこの娑婆のいやな有様であります。ところが本当の菩薩というのはその中にすっかり入りこんでしまつていて自分はさ

能がある、これは生活のために必要じやと考えたりして、決してそういうような自分の間違つた、猛獸毒虫のようなものと感じておらないのであります。そこを感ぜしめよう、感じなくてはならないというのが、この火宅の譬である。

その車というのは声聞（しやうもん）、緣覺（えんがく）、菩薩に譬えてあるので、声聞緣覺というのは小乗のさとり、つまり自分だけさとりをひらけばよい、そのうち声聞というのは、仏様の教を聞いて、教のままをむしろ律法的に実行しようとするような態度のものが声聞である。そして緣覺というのは、縁あつてさよればよいのだ、花が散るのを見て、或は木の葉の散るのを見てそれによつてさよればよいのだということを考へているものであつて、それだから自分一人の心の落着くということだけを求めてゐる。それじやいけない、そこに菩薩があげられてゐる。羊の車、鹿の車、牛の車というのは声聞、緣覺、菩薩にたとえてあります。

子供がいよいよ出て来て、お父さん約束の三つの車を下さいという時に、一つの白牛が引いてゐる何とも云えない飾りをつけた大きな車を子供等一人一人に与えた。すると子供等は非常に喜ぶ。その大白牛車と云うてあります、一つの大きな白い車というのが法華一乗の法にたと

つてゐる、別だという顔は決してしない。更に異趣なし、ことなるおもむきなしであると聖徳太子が仰言つてゐる。その通り大白牛車を頂いたならばそれによつて乱れ濁つた、穢い娑婆世界に入りこんで自分の底分のところを尽くして行く、それが本当の仏教の精神だということになりますわけでありまして、そういうことから考へまして火宅の譬というものが非常に有難い尊いものであつて私共がそのおたとえ通りのことが實際問題として中々出来ぬのであります、どうしてもそういうところに行かなければ本当でないということになりますわけであります。

そういうことで火宅の譬というものが尊い、また有難いものであるということになるのであります。それで今火宅の譬ということと長者窮子の譬という両方のものが實際の私の問題となつて来なくては本当でないわけであります。火宅の譬のように自分が仏のお慈悲を身にうけたならば、その心持で濁つていようが、苦しからうがこの世の中にあつて自分のすべきことをして行く、そうでなくちやならぬ。

それをどうした力で出来るかという、長者窮子の譬のように飽くまでも親の力だひとつ、つまり仏様の御力ただひとつでそうしたことが出来て行くのである。その大白牛車を頂いたというのは、仏の力を私が頂くということな

るのであります。そうでありますからして両方が一つになつて私共が世に処して行く道が定まるのであります。非常にありがたい譬なのであります。譬として表面ばかり見ておりますという一種の文学になる。平安時代の^{おみやど}大宮人は随分この法華經をもて遊んでいたようでありすが、そういう人達にとっては法華經は遊ぶための道具になつていたようであります。そんなことでは本当ではない、かと云つて日蓮上人のような態度が本当か、法華經を南無妙法蓮華經につづめて、これを称えて行くばかりであると非常に強いのであります。そこにもすこし心のゆとりと申しますか、あたたかみというものがあつてに相違ない、日蓮上人にはそれがあるのであります。日蓮上人はひどく強い言葉云つておられる。私がまだ熊本の第五高等学校の生徒でありました頃、御存じでありますか、高山樗牛の晩年の文章に況後録（きようごろく）という文章があります。ここに私写したのを持って来ておりますからあとで一寸お目にかけましょうか。その況後録というのは高山樗牛さんが日蓮上人の強い文章から大分拝借して、佐渡が島における日蓮上人自身の心持を云いあらわすというふうなもので非常に強いものであります。これはその頃の私がまだ青年時代でありますから非常に感激してすっかり写したものであります。そのはじめの方はこうなつています。

伊東に死なず、滝口に斬られず、不思議になからえいのちも、ここ佐渡ヶ島を今は最後の地と覚ゆるぞ。あら嬉しや人々、これほどの喜びを笑えよかし、日蓮ほどの果報の者また世にあるべしや。いにしえより君のために死せし者、親のために死せし者、妻子財宝のために死せし者はあれども法華經のために生命を捨てし者ありや。この經のために生臭き首をはねられんは、いさこに黄金をかえ、糞に米を替ゆるに同じ、今こそは草露の日影を待つばかりなるいのちながら化城の迷いはるかに去りて、靈山の開闢まのあたりにあり、頸は鋸にて引きも切られよ、胴は稜鋸^{りやうさのこ}もて貫ぬかれもせよ、足に絆しを打ちて錐捫^{きり}みにもせよ、この息の根の通わんほどは南無妙法蓮華經の声をばよも絶たじ。

これが佐渡ヶ島にての日蓮上人の心持を、上人の文章から大分借用して高山樗牛さんが書かれたもので一寸長い強い文章であります。その頃の私はこんなのひどく感激しまして、今の況後録を始めから終りまで暗誦しておりました、今は忘れておりますけれど。

そのように日蓮上人には非常に強い一面がありますけれども、また一面非常に優しいあたたかいものがあります。

日朗と云うお弟子が牢の中に容れられている。その日朗につかわされた手紙なんかは実にあたたかい心持のみなき

った手紙であります。そうでありますから日蓮上人は、そんなことを云うと怒られるかも知れませんが、ちつと分裂していたのであります。非常に強い一面と非常にお弟子に對してあたたかい一面と分裂しておりました。それが分裂がなくなつてしつとりとした日蓮上人になられたのは身延入山以後であります。私が非常に尊敬しておりました日蓮宗関係の方でもうとくに亡くなられましたけれども守屋貫教という方がありました。その方が自分は日蓮上人に親鸞聖人のようなおもむきを見出すことを一生涯の問題としてゐると云われました。ただ惜しいことには六十三四で亡くなられましたからそこまで行つたかどうか。この方の書かれた日蓮上人の伝記があります、それを持っています。たが今手もとにありませんけれど、この方は私の尊敬して居つた人でありまして、その当時の所謂日蓮主義と云つて

いる方々は皆本當の宗教になつていないと云うことを云つておられました。それからドイツでこの方に会つたことがあります。ドイツでマルチン・ルツテルのことを研究しルツテル関係のものを読んで大分ルツテルに感じたこと云つておられました。然し今更自分がキリスト教でもないがルツテルに非常に感じましたということ云つておられました。この方が八十・九十まで生きていられると日蓮宗の味わいのいいところが出てきたに違いないのであります。

と惜しいことであります。私かもとの中学を卒業した時に東大を卒業された方でありまして大分私と年齢のへだたりがありましたがそういう人も日蓮宗の方にありました。

今頃日蓮上人を云っている人達はすこしおかしいのであつて、創価学会なんかえらい勢いで折伏授受（しやくぶくしようじゆ）のうち折伏ばかりやっている。仏教の本當の精神は折伏と授受、間違つたのをたたくと同時に間違つたものを温かく抱いてそれをとかしていく、とりいれていく、胸に受けいれていくそれなくしては宗教になりません。のに、今の創価学会の人はえらい強い勢でやっている。或人が私の家内に説法に來られて半日説法されて家内はそのために二週間床につきました。そういう行き方というものはどうかと思ひます。ただ押しつけて行くようにしていく、信仰というものはそんなものじゃないのであります。それだから日蓮上人のただ題目一つでいく。それは結構でありますけれど、その中に折伏と同時に授受の精神が入つて、日蓮上人はその精神があつたに違ひない、それは今は折伏という方面だけをとりつていふのは本當でありませんし、仏教の精神にかなわないことでもありますし、聖徳太子の御精神にもそわないことにもなりますのであります。

それでどうぞ皆様はそういう日蓮宗の方にお会いしたら、向うの人に喧嘩でなしに、本当に人間の心の潤いというものはこういうところではありませんかという話を話して下されば非常にありがたいのであります。と云いながら私がどれだけのことが出来ますか、それは問題でありますけれど、そういうことを思うのであります。

とにかく長者窮子の譬と火宅三車の譬で、ことに長者窮子の譬でもって徹底的のあたため、徹底的の親心でありますからして、それと火宅の譬の我々の人生をたとえてあるそのところの両方をよくかみしめて行けば法華經というものが日蓮宗・天台宗のものでなくて私共のものにもなる私共に大事なことを教えて下さると、こういうことを感じますのであります。

法華經をお読み下さいとは申しませんが、法華經というものはそういうものでありますからして、お氣がむいたらお読み下さるようになります。しかも仏教のお教というものは一度一寸読んだのでは駄目であります。私が二十四才からはじめたと云いまして、それから後今までに何度かくりかえし読んで、それでは分ったかと申しますと、分ったとそんなにはつきり云えないものがありまして、そういう求道の問題は一生の問題でありますからして、親鸞聖人の大事な信仰を中心にして、その上から法華經というものの

脳神経のマイナス過程

柳 瀬 留 治

私共の脳神経細胞が百五十億といわれているが、大体二つの働きをしている。プラス過程といって知覚を受けた刺激を直ちに反応し行動に現そうとする積極性のと、もう一つはマイナス過程といって、直ぐに行動に出さず、それを抑制し考え直す働きとがある。考えるとはプラスとマイナスとを繰返すことだという。

生れつきもあり、幾分環境のせいもあるがプラスの働きの強い意欲的な人があって、老いても若々しい希望に溢れ突進する。現代の青年の多くは大脳神経を使おうとせず体力を仕上げる中脳や間脳の神経の働きのみで事を決し三面記事を賑わしている。又世はアメリカニズムをよいことにして欲求充足が人間の権利の如く思い、欲求不満を感じさすのが社会や国家の罪だとし、欲求の野放しが真の自由だとしている。概して社会生活に大切なマイナス過程の働きを欠いているのである。

動物にもマイナス過程の働きがある。特に羊や鹿や兎な

大事な味わいを頂いていく。こういうことが大切であります。そのためには、長者窮子の譬というものを真中において、それから火宅の譬というもので我々人生の何とも云えない姿というものを見せつけられ、その後にはまた譬話が五つ位あります。そういうものを御覧いただくといいかと思います。私自身はさあどこまで読みますか、残りの寿命はあんまりありませんから何処まで見ることが出来ますか、またあうことが出来ますか、これは問題であります。

ここに持って来ました法華經は私のものではなくて、宮沢賢治という人、御存じでしょう、あのすぐれたお伽話を沢山書いた、あの賢治さんが一昨年亡くなった福田鉄雄君と云って、これは第二高等学校で私と親しい関係になってそれから五十年間求道の人でありまして、おしまいは病で十八年です。病床にあってたりしながら道を求めて行った非常に尊い生活をした人です。慈光誌に色々出ましたからお読みになったかとも思います。この鉄雄君がまだ生きていた頃、その宮沢さんが死ぬる時にお父さんにたのんだそうですが、私が死んだらば法華經を印刷して親しい方々に配ってあげて下さいと、その一冊であります。福田鉄雄様と書いてあります。これを鉄雄君も貰われました。それを奥さんから借りて皆様に見ていただこうと思って今日持って来しました。そんなことであとはいろいろ問題を出していただきます。

どの草食動物の行動に見られる。欲望の野放しでは命を危くするからである。人間も同様である。存分の欲望がとて果たせないのが昇華（欲望が転じてたかめられること）が必要となり、芸術が生れ、宗教があるのである。これは抑制過程が深く人生を掘り下げさせて生まれたのである。先日、野鳥の中西悟堂先生を訪ねたら、しきりにそれを云っておられた、同感に堪えない所だった。

動物もそうだが、人間もプラスのみ考えてマイナスを考えまいとしている人が多い。外向性の人は勿論だが、内向性の人も生きていくうちは花やかに陽気に、無常や死などころにいかず、いつまでも常住する考えで行こうとし、死など時が来て現実に処理することだ、その刹那までそんなことを思わぬのが賢明だとしているようだ。

ところが私などマイナス神経が強く、それに宗教的にものを凝視する傾向から最近とくに死の無常を痛切に感じる、一般に誰もが、生きているものは死ぬのが当り前と心

得てはいよう。だがそれは概念としてであって実際に死に瀕しての決意ではない。大戦時の特攻隊員も恐らく悟つた上の決意ではなく、母国のため、護国の神となると外から讃められつつ強制され、自分でもまた榮譽に酔わされての一時的のものであるまいか。又宗教信仰の上で死を覚悟し、明るく歓喜法悦に満ちて念仏しながら息絶えた人もある。

しかし私などは、生の執着が強くて、この身体やこのところの空無に帰するのが、なさけなく、死のきわまで恐らく見切りがつかぬであろう。唯こうした私を憐んで下さる聖（ひじり）の御心に涙し、念仏するだけである、恐らく死にきわもそうであろう。

先日詞友の一人が訪ねてきて、最近虚脱（うつろ）になつて力が抜けること（を）を痛切に感じて悩んでいるという。二人の男子が膝下を離れて大学に入っているため孤独になつたのであろう。私も等しく老いて死に向う孤独に悩んでいる。あなたも私も遺方（なだ）のない虚脱を救うものは唯々念仏一つだと申したことがある。虚脱を感じる者は感じない多くの人より幸福だ。光に遇えるからなのだ。

八四十三年五月号 短歌草原、冠頭言

疾病と信仰

一、疾病と求道

吾々が病氣にかかると、平生健康な時の心もちとは違ひ種々な煩悶苦悩が起つてきて、相当に修養の出来て居つたものでも、気短くなり愚痴を起しやすくなる、そのために一属病氣を重くすることがある、おまけに周囲の人々にまであたりがひどく、迷惑をかける様になる。自分では腹を立てたり、愚痴をおこしたり、クヨクヨ考えることはよくないと、充分承知しておりながら、なかなかそれがやまない。如何に考え直してみたところで到底やまないから縁にふれるとまた起ってくる。然るに世間では大抵の人が病氣さえ治れば、こんなつらい思いは無くなるから早く治してもらいたいと云わるる。

「代金は高くてもよいから良い薬を下さい」

という注文は、吾々医師がよく聞くところである。心の煩悶が救われることよりも、身体の病氣を治す方が急務であるからと、唯病氣のことのみにとらわれることになる。

父五十回忌を終えて

この夜頃疲れ眠れば夢にさへ父の来まさず逢ひたきものを

未っ子の男の子の我を力にし やもを二十年通しまししなり

七十七と子の我なりぬ幸なくて七十二にて死にましぬ

父

死の先のま闇の父よこのみ名に頼らせとこそせめて言ひにし

○

死の際（きは）も生細胞は死なじとし覚悟させずて果てしめぬべし

死ぬべしとは理知の上のみまだまだと思ふ我情の老いて強かり

一つ信を力となしてその際まで牛馬のごと我あらむのみ

体おきて命消えゆくはかなさを御憐みによりてこそゆけ

師の書幅己が宝となしてあれど死ににし後は散り失せぬべし

「短歌草原」より

（医師）麻生介

もっとも病氣したからには、その治療や養生について最善の方法をとることは勿論必要である、決してその手当をおろそかにしてはならぬ、唯しかしながら、それでよし病氣が治ったからというて、心の煩悶は永久にやむものではない。何故かと云えば「一難去ればまた一難来る」のが世のありさまであるから、心の上に眞の解決が出来ない限り、苦悩の根は絶えない。若し不幸にして治らない場合は解決の出来ないまま暗路に迷ひ行くほかはない。故安渡氏は

「人間が病氣になると、唯病氣が治りさえすれば、自分は満足だと考えている。さて病が治つてはたして自分は満足が出来たかというに、忽ちお金が欲しいになつてくる。お金が出来てきて自分は救われて居るかというに、忽ち名譽が得たいになつておる、つまり自分というものは限らない欲望の持主である」

といわれた、まこと吾々の心はその通りである。

病は肉体的のものばかりでなく、精神的の病氣でも、必

ず医師の治療を受けるのが最善の方法である。世間では神仏におすがりして、そのお蔭で病を治したいという思惑から、トンダ迷信になることがある。医師はそのために手おくれになった事例を見ることが少なくない。学問や智恵のある人でも、病気のつらいところに、不思議な現象を見せつけられると、ツイ迷うことになる。治りたいが腹一パイのところ「治してやるという神仏がある」といわれると、その方に心が傾くのも無理はない。しかしこちらの方から神仏に向って一心にお願いするから、その代り病気だけは非治して下さいというのなら、まるで神仏と五分五分の交際をしておるかたちである、それでは満足安心のできようはずはない。

一体こちらの方から病気をよくして欲しいと頼むところのはからいで治ると思うのが、大きな間違いである。自分の思惑を主として神仏を自分に従わせようとするのが自力の迷信である。

「如來の廻向に帰入して願作^{がんさぶつしん}仏心得る人は

自力の廻向を捨ててはて利益有情はきわもなし」

という御和讃がある。実際に仏の無限の御廻向に腹がふくれて見れば、こちらの方から願ったり祈ったりする必要は毛頭ない。こちらの方からの願や祈りが末通らぬのと同じ時に効果がないことは信仰の上からハッキリする。そこで

とのみ考えている、余りに治り度い方の思惑が強いために治らぬ側などは少しも考慮する余地がないことになる。

又医師は人情として、病人に向って自分の考えを包まずに、直接ハッキリと死の宣告を下すという事は出来ない、そこで先の例のようにツイ心にもない気安めを云うて其場を逃れるのが普通である。それだから病人でも死を自分の實際問題として痛切に感ずることがすくなく、且つ困難である。

私が平生、達者な人に向って信仰談をすると、多くの人はどうかというに

「病氣にでもなるとか、何かの動機がなければ信仰には入れないだろう、大抵の人が何かひどい目にあってから信仰に目覚める人が多いように見受けるから」

というて死を遠方に押しやってみておるのが通例である。然し生死は一枚紙の裏表であるから余り遠方に跳めるのは間違いである。

「朝には紅顔ありて夕べには白骨となる」

のがお互いである。老少不定、火宅無常の人生である。「今までは人のことだと思つたにおれが死ぬとはこいつたまらん」

という狂歌はよくうがっている。実際自分自身の死に行き詰つてみれば何ともして見様がない、ある金満家が

私は病氣が治るという方の側に聞える声は未通つた真実の光ではないと申したい。たとえ病は一時治つて神仏の御利益があつた様でも、それでは真に永遠の満足は出来ない。何となれば人生の最終点は死の暗黒面であるから、その方向には不安の影が横たわつておる。誰しも死ということは嫌であるが、また誰しも一度は必ず逃れることの出来ないのが死である。或時、医科大学を卒業した人で病氣にかかり、いよいよ重態に陥つた際に、自分で余命幾ばくもないことを承知しておる所に、某博士が来て、

「ナニニ大丈夫、そんなに心配しないで治るよ」

というて、治る方に力をつけたが、よく自分の病態を知つておるその病人は、

「先生がそんな気休めを言われても最早私は駄目です」

と答えて、何等の慰安にもならなかったことがある。

又その反対に、病人自身で「今度の病氣は必ず治ると自信しています」などと自分決めに治る方の側に安心しておらる方もあるが、その自信が崩される時は非常に失望落胆することはのがれられない。

さて私の経験から申せば、その死ということを現在自分自身の問題として考える人は甚だまれなようである、タトイ医師から不治を暗示されても、どうかしたら治るだろうとしてなりと今一度は達者になつて再び活動して見たい

「ア、淋しい何か握らせて呉れ」

と臨終に言つたそうである。実際自分が死ぬることになれば、手も足もでない、淋しいたよりないばかりで全くどうすることも出来ない。人間としてこれ程困つた、嫌な問題はまたとあり得ない。然るに誰でも一度は死ぬるから仕方はない、と一人であきらめて深く考えないのが普通である。それだから淋しい頼りない点はそのままである。中には死にさえすれば万事解決するように思つて、

「こんな苦しい病氣をして長く生きておるよりも、早く死んだ方がましだ」

などと自由を云うて闇に迷うて行く人もある。

要するに如何に仕合せのよい方でも、何程平和な日暮しをしておらる人でも、死という問題をもたぬものは一人もない。唯平生無事な時はそれを問題とせず、遠方に見てウカウカ目を送つておるにすぎない。然るに皆様のうちに病氣になり、死という實際問題に直面しておらる方があれば、達者な人よりも一層一日も早く真面目に且つ徹底的に解決、即ち信仰の道に進むべきまとないよい機会である。若し余り病が重くなると苦痛が増してとても道を求めるなどという氣力もなく、大事をとりそこなう事を断言しておきます。

さていよいよ病重く「今生死岸頭に立つて居る」となれ

ば、何が頼みになり力になるものがあるでしようか。家族信友、地位、資産、名譽等は勿論、大切なこの身体を捨てて出かねければならぬ、

「大丈夫治りますよ」

という治る方の側に聞える声はすこしも力にならぬ。治らぬ死の暗黒面のありだけを見て

「汝一心正念にして直に來れ、我よく汝を護らん」

との西岸上のあたにかき招喚の勅命一つが力となり頼みとなり、未通る道となるのが私の信仰である。この御声一つを真に死に直面したお方に聞いていただき度い。死の暗黒面に気づかれ、且つ悩まる方であればキッと聞きとられて満足、安心されるに違いない。某大徳の辭世の詞に

「病重く今日此世を去る、七十余年迷夢晴る、

死に臨んで心中一物なし、唯聞く岸上招喚の声」

というのがある。死に臨んで見れば心中一物として役に立つものはない。死の暗黒面全体を、かねて見ぬいてよびかけ給う大慈大悲に導かれ、真実の報土に目覚めさせらるるの外はない。この境地に満足安心させねばおかぬ絶対の力が本願であるから、繰り返して聞かして頂けば必ず一度は徹底するに相違ない。「いかに不信なりとも聴聞を心にいれ申さば御慈悲にて候間信をうべきなり。御聞書」

二、苦惱と救済

医師はただ身体の病気を予防し、又は治療さえすれば責任は済むわけですから病氣の原因を見出して、治療に最善の方法をとるべきは勿論であります。然しながら、心に煩悶苦悩が多くては治るべき病気でさえむづかしいことが多い。その煩悶を真に解決するのは、どうしても自分の力では出来ない。幸に私はその煩悶苦悩と救済解決の経験を持つていますから、今そのことを申し上げてみたい。

一体病氣というものは十人は十人、百人は百人ながら、皆全快するというわけにはいかない、殊に私の専門としていた呼吸器病の患者は多くは重症になって来らるるが多い。それで治療に苦心しても遺憾ながら病氣を治し得ない場合がある。△昭和四年頃の状態▽治らない病人が医師の門を訪うた時は、対症療法というて、せきで苦しむものにはその鎮まる薬をもち、咯血があればその止む処置をするくらいで、自然の経過を待つ外はない。其の際患者から

「氣永く治療すれば確かに治りましょうか」

と問われると、心にもない氣やすめをいうて一時逃れをする外に道はない。つまり医師として治らぬ病氣の治療を頼まれた時程心苦しい事はない。其際私の立場として

「自分の力の及ぶ限りつくすより仕方はない」

と打切ってしまうはそれまでであるが、信仰の上からど

うしてもそれきりに捨てておけないところがある。それは「肉体の病はヨシたすけることが出来なくても、精神的には確かに永遠に生きる救いの道がある」

からである。この道一つは病が重く不幸にして死の転帰をとられる方には勿論、病氣が治って、再び人生に活動される方々にも是非必要である。現に私は今この道に救い出されて皆様にこの真実の一道をおすすめておる。この道は病氣を治す医療とは違い、十人は十人、百人は百人ながらたすかる教である。蓮如上人は

「ただ一心に阿弥陀如来を一念に深くたのみまいらせ
て、御助け候えと申さん衆生をば、十人は十人、百人は
百人ながらことごとくたすけたまうべし」

と教えられている。

さて如何にしてその救いの道に入るかというに、今申上げて「仏の本願ということを皆様が現在御自身の持つて居らるる實際問題の上によくお聞きとりになればよい」のであります。

そこで先ず皆様の問題はほかにして、私自身は世の中においてなかなか不足が多い、ことに思いがけない病氣にでもかかると、ああしてこうしての思いが非常にはげしくなる。しかも思いのままにならなければ、それだけ余計に煩悶が増してくる。自分として「かれこれ考えたところで仕

方がない」とは知っていながら、どうしてもやめることが出来ない。その結果、自分一人で苦しむだけでなく、周囲の人にまで氣が荒くなる。私の或信友が病氣になった時、「病氣が重くなって苦痛が増してくると、周囲の人に対して自己を修飾して出すだけの余裕がなくなる。再び病が薄らいで苦痛が軽くなれば自己を修飾し、自然に言葉使いなどもやさしくなる、そうしてみれば修飾しない自己は醜いものであると懺悔された、そしてその醜い自分をお見捨てない大慈大悲がよろこばれた」ということであつた。私はその話を聞かされた時、法然上人が

「ひとえに病源を得てこれをよろこぶ」

と言われた意味を深く味わせていただいた。恵信尼公が「病は死のたよりに候えば御慈悲の程一入頼もしく候」と言われてある御心持もよくわかる。恩師近角先生が「信仰は今日の無事をよろこぶことではない」

と教えて下さった思召しが誠にありがたい。どうかすると、自分に都合のよかった事に信仰的意義をつけて神仏の御利益、御恵みを語るのを聞くが、私としては同意が出来ない。勿論修養の出来た方は、タトイ病になっても決して醜い姿を外に出さず、辛抱して居らるる方もあるが、それでは外に出さぬだけ、知らず識らず苦悩の淵に沈み、こと

に婦人などはそのために神經症になることが多い。その際外面には平氣をよそおっているけれども、内心には確かに苦惱の影が潜んでいる。その時、人から親切にされてもその外面のみを見て言うてくれるにすぎないから少しも満足は出来ない、時として却ってうるさい感じさえることがある。それはこちらの苦しんでいる内心の暗黒点と人の親切心とが違いになっているからである。自分は

「病が重いから死ぬようなことはあるまいが、死にたくない、死んでは困るがどうしたものか」

と苦心しているが、表面には出されもしないから一人で考えに沈んでいる。この場合周囲の人は大抵

「ナニ病気で死ぬるものではない、力をおとしはいけません、悲観しては病のためによくないから氣を楽にもちなさい」

などというて、治る方に力をつける。

併し病の時に悲観するとか、氣を楽にもととかいうのは無理な注文である、それは素人^{しょうと}だけでなく、医師でもまた病人の氣やすめに

「病氣は余程よくなりました、心配には及びません」

と言いたくなる。しかしそんなお互人間同志の言うことは未通った真実でなく、所謂一時の氣やすめにすぎないことが多い。然るに仏の本願はどうかというに、お互人間の

縁つきて力なくしておわるときに彼の土へはまいるべきなり、いそぎまいるとき心なきものを、ことにあわれみ給うなり」

とある。苦惱の根底をお見抜きの上、まいりたき心の無^むいお互をことに憐み給うとの御思召しである。今、まのあたりこの限らない御同情、御真実を聞かされて見れば、病氣がよくなるという方面よりも、むしろ病氣が重くて、何とも仕て見ようがなく、不足のやまない、死んだらどうなるかと心細く思う側において、仏の慈悲一つが入り満ちて下さることがある。どんなに不足のやまぬお互いもこの無限の慈悲には自然と満足せざるを得ぬことになる。即ち人生における不足の根を仏の大願業力によって断ち切るることになる。凡情としては病氣がよくなればよろこび、悪くなれば悲観に沈むばかりであるが、今仏はその沈まねばならぬ側に手をさしのべてお救い下さる思召しである。御和讃に

生死の苦海ほとりなし久しく沈めるわれらをば

弥陀弘誓の船のみぞ 乗せて必ずわたしける

とあるのは、このしぶといお互いが仏の救いの船に乗せられて、今日から永遠の樂土に渡されて行く姿である。お互いは人生において病氣のよくなる方面にのみとらわれて、よくならぬ方、すなわち沈む側には気づかないでいた

賢善精進の外儀(げき)のすがたを排して、内心にひそんでいて、してみようのない苦惱のドン底を見て

「我能く汝を護らん」

との真実慈悲の思召しである。お互いの表面に出し得ない煩悶苦惱をよく察し、よく理解して見捨て給わぬ永久の御恵みである。人間同志ならば、

「そんな弱い心であつたか」

と驚きあきれるべきところを、一向にあきれ給わぬ絶対の御慈悲である。病氣は治るから心配するなどの仰せではない、病氣になつて見れば、

「人生に独りで苦しまねばならぬ汝を特に見捨てがたく思うぞ」

との御真実である。

「病氣すれば何処々々までも心配するのが汝の性分であるから無理はない、我はその性分を特にあわれに思うからには、その心配苦惱のある限り見捨てぬぞ」と仰せである。歎異鈔に

「いささか所勞(やまい)のこともあれば死なんするやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為なり、久遠劫より今まで流轉せる苦惱の旧里は捨てがたく、いまだ生れざる安養の淨土はこいしからず候こと、誠によくよく煩惱の興盛に候にこそ、なごりおしくおもえども娑婆の

ところに、今思いがけなく、仏の救いは、かねてこの方面を見て下されて、生死のきずなを断ち切り、真実の報土に導き入れんとするやせない思召しであります。

法の友 麻生 介

なつかしき御法の友のたすねきて

知られけりおのが心のつめたさを

病みぬれど心はやすし御仏の

法の友のあつきなさけに

ひかりのうちに目をおくる身は

みだのみむねのいずみなるらん

病める身もなくさまれけり御仏の

御法の園の花をながめて

おもふことかなわぬときぞしられける

弥陀の誓の深きいわれは

米寿老人の一人旅

三 瓶 徳 英

御臨末の御書というのは後世の人の作だという人もあると聞きましたが、私は一人で念仏すれば其処に「我も居るぞ」と聖人は仰せ下さるような気がするのであります。

私は六百五十回御遠忌の当時、西本願寺執行所役員の末席に居り、時々内陣への出勤を命ぜられ、御真影を間近かに拝みましたが、ある日、晨朝の勤行が終つて暫くしてから内陣係の友人に出逢い、内密で御真影を拝ませてくれたのみ、須弥壇へ上り、最も近く拝みました。

威厳鋭い御顔で、御眼は生き生きとして涙ぐんで居られるようで、御口は今にもものを仰せられそうに拝まれ、私の不法懈怠を叱られるように思われ、再び御顔を拝むのが恐ろしく、打伏して涙と共に念仏しました。友はお扉を閉める、広い須弥壇から下り、礼を云うて事務所へ行きました。

本年は明治百年で、私は米寿となり、今は島根県飯石郡頓原町老人ホームの御厄介になって念仏生活をさせていた

だいて居ります。

今生最後の御礼拝に本願寺骨肉の御真影を拝みたくて、兄弟や知友の旅行反対を押し除けて四月五日に出発し、二十日間の旅行を終り無事に帰らせて頂きました。

私の念仏は無声の念仏で発声の念仏は稀であります。それは、養老院は八畳の室に四人の共同生活で、神道好きが一人、酒好きが一人、生長の家好きが一人と私の四人暮しで念仏をあまり好まない人ばかりなので発声を遠慮します。慈光四月号の西元先生の教訓をありがたく拝見しました。

現世利益は人々の望むところで、聖人は現世利益和讃を書きのこして下され、教行信証には、金剛の信心を獲れば迷いの道を離れ、本願一実、念仏無得の大道を行き、現生に無量の徳をうると仰せられました。

この春の一人旅を遂行した跡をかえりみればたしかに大

きな現世利益を頂いたことを思い、西行法師の

心だにまことの道にかないなば

いのらずとても神やまもらん

の歌を思い出しますが、私にはまことは更にありませんけれども、他力念仏の親のまことを私にあたえられる無上の大利であります。古歌に、

いのれどもしるしなきこそしるしなれ

いのるころにまことなれば

と、自力無効、我儘根性の通らぬよき警めであります。

絶対他力の念仏に安住する生活
何一つ不足が言われぬ満足感謝

他から悪くされ、わるく思うなれば、悪く思う方がわるいのだと近角常観先生から聞かせて頂いたことを時々思い出します。

○
隣室に病人が出来、重態の人を見舞い、左記の仮名書きの紙片をあげました。

御和讃に

一形（いちぎよう）悪を作れども専精に心をかけしめて
つねに念仏せしむれば諸障自然にのぞこりぬ、
とあるのをやわらげて、と書いて
よるひるあくをつくれども

みだのおしひにたすけられ

こころでねんぶつしておれば

さわりじねんにきえていく

○
湯泉津、浅原才市同行のひとりごと

わしやあーまんだ、ごくらくをしらんが、ごくらくはど
こかな、

こんなばか、おどりやあ（お前は）まんだ　ごくらくう

しらんか、だいぶんばかだなあ

ごくらくはなあ、なんまんだぶがごくらくだよ、

ふんそうかい、そりやあ、そりやあありがたい、なんま
んだぶ、なんまんだぶ

右の仮名がきを病人にあげました。聖教に広畧相入（こうりやくそうにゆう）の論理を説かれたことと、才市同行の言葉と同一味と思います。畧の極点の一法句の念仏の効用がのびひらけて人生生活、倫理道德、哲学科学も出現し、極楽も浄土も、仏も菩薩も、宮殿楼閣も、七宝樹林も、八功德水も、往還の廻向も、俱会一处も、皆出て来る、父母師長、また一切の大恩も、念仏の大行で報謝し得る、絶対他力、不可思議の妙法、仰ぎても仰ぎてもありがたい稀有の教法を聞かせて頂きました、南無阿弥陀仏

空過光陰閱米年 行住坐臥煩惱縁
迷路惑道無定志 唯称弥陀常自然

歎異血淚枯草翁 唯円大徳不能空
絶對他力非常語 能破盲冥胸裏豊

無限業報顯現繁 就憐不眠愚痴痴
忽念大悲無倦法 自然称名他力恩

○ 何もかも他力廻向のお恵みに現世の利益仏のたまもの

極悪の我に念仏宿りまし神も仏もまもりたまえる

今日も亦弘誓の舟の中なれや生死の苦海波荒くとも

(昭和四三、五、五日 稿)

今日ばかり思う心

尾西市 中島彰悟

「今日ばかり思う心を忘るなよ、さなきにいとど望み多きに」これは覚如上人の御詠で、御一代聞書にも引用してある。今日一日と思え、さもないと、いよ／＼望が次から次へと起きて悩みが多くなつて、仏法に大事がかからぬという意味である。求道の旅は、今日一日が大事である。

○ 花は咲くにまかせ、散るにまかせ。鳥は歌うにまかせ、獸は走るにまかせ。善悪は過去の業因にまかせ、かくて業に曳かれ行く底下の凡愚のままだ、如来の心光に照されて歩々光明の中、露のいのちのこぼれ場が法性常樂の涅槃の都、常に業苦につまづく時は如来直ちに抱き起し給い、思いのままに御名を呼ぶ事を許して下された。こういう身こそ勿体ない限りである。

○ 名も無き野の花、賀古川の教信さんや、甲根山の巨海さんが居る、久遠の昔より、この大道を憶々の妙好人が行き続けている。五十の年を越えて見れば降り坂である。脚元に氣をつけ、油断が大敵。

歎異抄 第三章

花田正夫

① 善人なおもて往生を遂ぐ、いわんや悪人をや。

この一句は、本抄を一度でも読んだ人の眼を驚かすもので、或人は地獄で仏にお会いするよるこびに感泣し、或人は世を毒するものと危険視して毛虫の様に嫌うであろう。

それについて思い浮ぶのが中国の道生(どうしよう)法師の故事である。法師は千四百年前の方で、長安の都の青園寺にあって「涅槃經」四十巻のうち、初めの六巻だけが渡来したのを翻譯しているうちに、闍提成仏(せんだい)とは無信の徒、断善根の衆生(しゆじやう)の説を立てた。寺中の衆僧は、闍提は捨てられて当然である、それなのに成仏出来るなどとは危険思想であると極力排斥した。然し法師は「涅槃經」の中に、一切衆生悉く仏性を有すとあるからには、闍提も除外せられる筈がない」と断乎として抗弁したけれど、衆僧は、まだ六巻の中にそのような仏説は無い、これは道生の空想に過ぎぬと非難し、遂に青園寺から放逐し

た。

法師は南方揚子江を渡って、ひとり蘇州の虎邱山(こきゆうざん)に登り涅槃經を講じたけれど、人々は敬遠して誰一人として聴く人が無かった。そこで法師は、山中に石を並べて、これに「お前達俺の説くことが仏意に適うなれば返答せよ」と言って説法すると、石は皆うなずいたと伝えられる。後世長くこれを点頭石と名づけて記念された。その後、涅槃經全巻が伝来した時、果して道生の云う通り闍提成仏のことが五六個所出ていたし、ことに仏弟子であつて後に仏を捨てて自らの罪で地獄に墮ちた善生比丘が仏の御手で救われると云う、仏の大悲の限りないことが説かれているので、衆僧も驚いて、法師の神智を讃えるようになった。

(註) 釈尊が降魔成道のところで、魔王は成仏をおそれてこれを妨げようとして、金剛座の釈尊に「汝、その座を立て、汝は一人で眷属も無いではないか」と迫った

せんだい成仏
悪人成仏

時、釈尊は「大地を見よ、虚空を見よ、無言のうちに我がまことを証しているではないか」と言われると、天地が震動して、魔王は帰順したとある。これで真実は客観界に顕現することを知らされるが、点頭石もこれを象徴している。

また、無窮の仏慈を求められたわが聖徳太子は、はじめて法華経が渡来したけれど、そこに提婆品の欠けていたので、太子は種々苦勞されてようやく完全なものを取り寄せ、非常な喜びと満足を得られた。この提婆品は、仏敵として世に流布される五逆、重罪、闍提の提婆と、障りの多い五歳の童女との成仏を説いてあるもので、仏慈の至極をあらわされている。これを得られて太子は、太子と太子を取りまく一切の人々の残らず成仏出来ることを確信せられて、どんなにか感泣されたことが。太子憲法に「人はなはだ悪しきものすくなし、よく教うれば従う……夫れ三宝によりたてまつらずば何をもちてか枉（ま）がれるを直うせん」のころも、この仏慈をうけられてのことであろう。ことに、釈尊が提婆を善知識とあがめていられることに太子はどんなにか深い感銘をうけられたことか。そこに太子は、叔父君崇俊天皇を殺害して横暴を極めた蘇我馬子をも知識として心の奥深く拜まれたことであろう。この無窮の仏慈ましまさねば、一切の地上の光は消え、ただ権謀術数

乗の教や世間善を行ずる者は善凡夫、凡夫にして惡縁にふれて何一つ善は出来ず十惡、五逆、破戒の罪を重ねる者は惡凡夫と云う」と、ひとえに仏意をうけてそのままに述べられた教がその根本であると愚考している。しかもこの惡凡夫の臨終に善知識があらわれて、弥陀の本願と念仏を直ちに勧め、夫々に淨土への道が開かれていく、この事実こそ「況んや惡人をや」と仰せられる根源であり、同時にそれは、善導、法然、親鸞の三聖の御自身の信心の根底をなすものである。

流れは遠く、弥陀、釈迦、善導、法然、親鸞と貫ぬきわたるこの徳者によって、心くらくさとりすくなく、惡重く障り多き我々は、そこにのみ人生の永遠の黎明を迎え得るのである、そしてまた尽末來際かけてその光明はいたらぬ限なく放たれて行くのである。然しながら病氣に気づかない人には、名医も妙薬も無用なように、この慈悲至極の仰せも自分が問題にならぬひとは聞き流すであらうし、自己を過信して、我れ善をなせりとか、未來に善行者とならんという獨善者にはこの聖語は大鉄鎚となつて、この慢心を苛責なく微塵に砕いて、やがて調伏し、仏の慈懷に摂め取って下さるのである。

さて私は歎異鈔をひもときはじめた時、それまでに自己の冷酷さと愚鈍さを歎いていたのに、「老少善惡の人をえ

のみに終始するであらう^うに、太子はこの「惡人成仏」のお誓いのたのもしさに、人類永遠の光明を見出されて「驚く三宝を敬え」と勧めて下さったのである。

さて、本章のこの一句は、親鸞聖人が法然上人から親しく聞きとられた金句である。このことは覺如上人が口伝鈔に述べておられ、また勢觀房は法然上人伝記の中に「善人なお以て往生す、況（い）わんや惡人をや」と上人の仰せが明記されている。ただし勢觀房がこの文の下に、「口伝これあり」と附記しているのは、当時法然上人の立教開宗せられた淨土宗に対して奈良や叡山の仏法者から誹謗の聲が高かった頃とて、こうしたギリギリのきわどい言葉は、上人の心ゆるされた者にだけ口伝されたものと推測される。

次に、善人、惡人とある言葉について從來種々と論じられて来たが、親鸞聖人は「善惡の二つ総じてもて存知せざるなり」とも「善惡の二字知りがおは、おおそらごのかたちなり、是非知らず、邪正もわかぬこの身なり」とも述べ懷されている、また法然上人も「白黒をも知らぬ童子のごとく是非も知らぬ無智の者なり」と常に言われている、して見れば、これは源を善導大師に求めねばならぬ。大師は觀無量壽經の疏文に「凡失にして大乘の教を奉じ、或は小らばず」の仰せに驚喜し、やがて「その故は罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」に、わが身目当の本願と聞き、さらに本章の仰せによって、いよいよ本願の思召しに身に泌みて知らされてきた。嗚呼、この聖語こそは衆生一切の煩惱罪障の薪木を焼き尽くさずはやまじとの如來誓願の烈々たる火焰と拝する。

② しかるに世の人つねにいづく「惡人なお往生す、いかにい）わんや善人をや」と、この条一旦そのいわれあるに似たれども本願他力の意趣にそむけり。その故は自力作善の人はひとえに他力をたのむ心かけたるあいだ弥陀の本願にあらず。しかれども自力の心をひるがえてして他力をたのみたてまつれば眞實報土の往生を遂ぐるなり。

我々の世間一般常識から云えば「惡人なおもって往生すい）わんや善人をや」となる。善人は歓迎され、惡人は捨てられる、だから何でも善くならねばいけない、悪いところを知られてはならぬとなる。しかしそうした理想を持って何時かは実現出来ると夢みている間はよいが、行けば行くほど自分の浅聞しさが知れ、いよいよとなると鬼となり蛇ともなりかねない身と知れては、絶望の淵に沈む。

それでも我々は我執我慢の心は強く、善くならねばならぬ、何時かは善くなれるであらうと、身を焦がしながら、自己の能力の限界を知ることが出来ない。それは丁度、瀕死の病人が、治りたい一杯から自己の死を顧みる暇がないのと同じである。

こうした心でいる間は、悪人成仏のお誓いも心にしみて来ない。こうした邪見傲慢の身も、絶えざる如来のお慈育にあずかって、機縁が熟し、その思召しの深いほどを、有縁のよき人から聞かされてみると

「お前はよくなりたいとばかり願っているが、それが出来ないで、如何にもやる瀬ないことであらう、切ないことであらう、その心は察するに余りがある。それを見るに見かねて、本願の船を用意したのだ、さあはやくこの船に乗れ！」

と、よくならねばならぬでもなく、わるくてもよいでもなく、そのよくしようとしてよくなれぬ身を全理解して下さる如来の悲心が、悪人成仏の悲願の船とあらわれて下さっていると知らされる。ここに自分の力で行けると思っていたことの身の程も知らぬ傲慢さも知らされ、本願ひとつに帰しまいらす時、真実の浄土の門が開かれる。

③ 煩惱具足のおれらはいずれの行にても生死を離るる

聖人御自ら「煩惱具足のわれらは、どんな修行によって、老病死、憂悲苦惱の境を離れることは出来ないのに」と述べられて「そのことを阿弥陀仏はかねてから照覽して下さって、たすけ遂げずばおかぬ」との切なる本願から「悪人を成仏せしめることが出来なければ、仏とはならない」との誓願をおこして下されたのである。その底の底まで悉く知らしめす仏の御真実心を仰いで「成る程、出来もしないことを出来るかに過信して、身の程もわきまえぬ私でありました」と懺し、且つ謝しまつるばかりである。

(註) 近角常観先生が「他力をたのみまつる悪人」とは、仏の御真実心をきいて、悪人が悪人と知られることであると仰言っている。又近角常音先生は、悪人が悪というはずはない、仏のお慈悲に浴して成る程そうでありましたと気づかされるばかりである。だから自己を掘り下げるとか反省するというようなことは出来ないことだ、と仰言っていた。又御自身のこととして「我慢のやまぬのが可哀相」と兄責が愚痴をこぼしていると兄嫁(あね)から聞いた時腹が立った。しかし、それをそれと知って可哀相というてくれることのありがたさに気づいて、さて我身を照らされて見ると、従順にしている、よくしていると思っていたことが慢心であったと知らされた々とよく繰返しておしえて下さった、先生の御体験の尊いお話である。

ことあるべからざるを憐みたまいて願をおこしたまう本意、悪人成仏のためなれば、他力をたのみたてまつる悪人もとも往生の正因なり。よて「善人だにこそ往生すれ、まして悪人は」と仰せ候いき。

さて、ここに聖人が御自身の告白として

「煩惱具足のわれらはいずれの行にても……」と仰言る。若しここで煩惱具足の汝等は、と仰言ったとすれば、私のようなひねくれ者はすぐ「聖人あなた御自身は？」と反駁する。しかし「われら」とのお言葉には、かえす言葉がないばかりでなく、そのまんま私自身の問題となる。

すべて聖人の仰せには、チツとも無理のない、自然なおもむきがあつて、聖人のひとり言と聞いているまんまが、私のことになってくる。ここが聖人一流のもののすごさである。それは如来の御はからいに打ちまかされた無我な信徳の自然として、主観のまんまが客観、客観のまんまが主観と、主客一如(しゆきやくいちによ)の妙境から流れ出るからである。このような法水の流れは、人々の讃否によって濁らされず、時代の流れによって消すことの出来ないものである。

自策の辞

(一蓮院秀存師)

嘉永五年十一月十一日。みずからつらつら思うに、私一人の言葉、誠に味わいあり。五劫永劫の御苦勞、私一人がためなり。仏の可愛い／＼と思うて下さるも私一人がためなり。お浄土を建立して待ち給うも私一人がためなり。

私は、私一人を一子の如く思うて下さる大悲のおまことを今日より死ぬるまで喜びたきことなり。阿弥陀様もこの秀存を一人子の如く思召して下さるる、私も阿弥陀様を唯一人の親の如く思うべきなり。「一子の如く憐念す」のお言葉、あらありがたや、嬉しや、忝けなや。私一人ということ忘れぬようにしてくれよ、わが心。

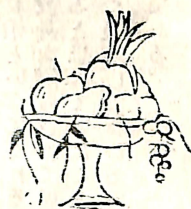
一人たりとも、という一人は私のことと思え、と人に對して云いたりしにあらずや。なぜ我心よ、さは思わざりしぞ。しかし私一人と思うたら、さみしかろうが、さみしからず思うてくれよ、わが心。

南無阿弥陀仏を称うれば 十方無量の諸仏は百重千重圍繞して よろこびまもりたまうなり。

また、

煩惱にまなこさえられて 撰取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて つねに我身をてらすなり。
有難や一人子を一人でおきたまわぬが親のお慈悲なり

あ と が き



八月の広島、長崎の原爆記念二十三回を
むかえてテレビに、新聞にその報道をき
き、悲しみを新しく心に刻んだ。そのとき

世界各国の人々が誌した感想文の中に、一
米国人が「真珠湾を思え、歯には歯を」と
書いていた。これは西欧諸国に根強い「報
復」思想のあらわれである。戦時、ヒット
ラーが「報復！」と叫ぶと全欧州が震え、
惨禍は増大して行つたことはまだ記憶に鮮
やかである。

それにひきかえ、七月に日本政府に招か
れて来日したセイロンの副首相ジャエルワ
ルデネ氏は、熱心な仏教徒で、対日サンフ
ラシスコ講和会議に、首席全權大使として
出席し「怒みに報いるに怨みをもってす
勿れ」と云って賠償権を放棄して、世界的
反響を呼びおこした。さてかような相対五
分五分の思想を超えた心こそ真に仏心の返
照である、誰か襟を正さない者があろう

か。日本では七百五十年昔、父君が横死の際
に「仇を討つな、仇から仇の修羅場に燈火を
掲げよ」との遺言をうけて法然聖人は出家
求道し遂に弥陀の大願海にその救済の光を
見だされて、万難を排して本願の地に伝わ
る道を開かれたのである。その後激戦地の
あとに敵味方供養塔を建て武將達は敵味方
共に仏の大悲に帰する事例が伝承せられ
た。そうして日本人の心の奥底に、怨讎の
彼方にある和らぎの光というものが植えら
れている。この種子を大きく強くそだて
て、セイロンの仏教徒にこたえたいと思
う。

○ 福島先生は、蕩児と窮子の二大譬喩によ
つて、絶対他力と仏心のひとり働きを明ら
かにして下さいました。真信尼物語に、目も
なく、耳もなく、口もない、焼けボタみた
よな我々を抱き上げて、苦しがるのが辛抱
をし、いままに正覺とつた曉には、汝を一番
先に救うてやる程にと云つて、仏の熱い涙
がハラハラとこかつた者が、法を聞くよう
になる」と、何時も涙ながらに語つていた
ことも思い浮かぶ。

柳瀬様は、大脳皮質と中脳と間脳の働き
を分け人間特有の大脳皮質の大切さと宗教
や芸術の關係を述べて下さいました。
麻生介様の原稿は医師の立場と同時に御
自身の大病せられた時の体験を根本とし
て、信仰の大切さを述べておられたす。ど
うか心をためて身読させて頂きましょう。

三瓶徳英師は、一期一会の旅をせられ

て、その感想をもらして下さいました。私
病中として切角の旅をお泊め出来ず残念に
思っております。

私の原稿は入院中の書き下しでありまし
て、講話ではありません。私が歎異抄のお言
葉にふれて只今心にひびくものをとりとめ
もなく書きました、御諒承下さい。なお私
の病状も只今は休火山状態に落着いており
まして、月一回の検診で氣長に見護つて頂
くことになりました、九月から日曜の例会
を始め、僅かの時間ながら談話会を催して
おります故御休心下さいますように。

第一、二、三日曜午後一時半、一道会例
会。

市電新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目
左入ル二軒目

定価 半年 二百五十円(送共)
一年 五百円(送共)

編集・発行人 花田 正夫
名古屋市南区駄上町二ノ八八
電話八二二局七〇三七番

印刷人 吉野 穂志郎
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

発行所 慈光社
名古屋市南区駄上町二ノ八八

振替口座名古屋一〇四七〇番